

審査の結果の要旨

氏名 松永 篤志

本研究は、東日本大震災で自宅に被害を受けた高齢者で、震災3年から3年8ヶ月後において、運動を実施しているということから精神的に良い状態にあるとみなされる高齢者の、震災後の経験を明らかにするため、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる半構造化面接を実施し、以下の結果を得ている。

1. 被災高齢者は、震災によって、全てを失ったように感じ、辛い気持ちで頭が一杯になり、危機的な状況に耐えるだけで精一杯になっていた。そのため、何かを考える余裕がなくなり、生きた心地がしなくなっていた。
2. 生きた心地がしなくなっていた被災高齢者は、支援や助け合いを受け、気持ち良いという身体感覚、自分の物や場所を獲得することによる開放感、好みの活動による楽しいという感覚、経験の共有・共感により辛い気持ちが癒やされる感覚を経験し、束の間ではあったがほっと一息つき、震災に伴う辛さを忘れ、自分が生きていることを実感していた。
3. 被災高齢者は、何度もほっと一息つく経験をする中で、他者とのつながり、生活の余裕、気持ちの余裕を取り戻していた。それらを取り戻した被災高齢者は、震災に伴う辛さ以外のことも考えられるようになっていた。
4. 震災に伴う辛さ以外のことも考えられるようになった被災高齢者は、自分を支えてくれる人に感謝する、震災で失わなかったものの価値に気づく、自分の命は震災で新たに授かった命であると感じるという、自分の震災体験が悪いことだけではなく、恵まれていることもあったことに気づいていた。そして、恵まれている状況にいつまでも甘えてはいられないと自分の現状を振り返り、感謝の気持ちを返したい、震災で失わなかったものの役に立ちたい、震災で亡くなった人を供養していきたいと、“この先”を新しく描き始めていた。
5. 被災高齢者は、このプロセスをただ前に進んでいた訳ではなく、ほっと一息つく機会が減少する、共感が否定される、復興の遅延に失望するといった、“この先”を新しく描き始めるまでに得たものを失うと、震災で失ったものを思い出し、生きた心地がしない状態に戻っていた。被災高齢者は、このように進んだり戻ったりを繰り返しながら、少しずつ前に進んでいた。

以上、本論文は、東日本大震災に被災した高齢者で、精神的に良い状態にあるとみなされる者の経験が、“この先”を新しく描き始めるプロセスであり、ほっと一息つき自分が生きていることを実感することが被災後の経験として重要であったことを示した。この結果は、これまで明らかにされてこなかった知見であると共に、今後起こることが予想されている災害に被災した高齢者への支援に活用できる知見であり、学位の授与に値するものと考えられる。